

野に吹く花とのかたらいの中で、  
古人はふとした事から可憐な花にめぐり逢う。そして、その花の風情におやっノという驚きを覚え、岩千鳥トキ草、鷺草それに時鳥など、ゆかしき姿に鳥の名をつけたりした。  
今、愛らしく咲くその花々にふれ

鷺草と時鳥

野に吹く花とのかたらいの中で、  
古人はふとした事から可憐な花にめぐり逢う。そして、その花の風情におやっノという驚きを覚え、岩千鳥トキ草、鷺草それに時鳥など、ゆかしき姿に鳥の名をつけたりした。

風情をその姿から感じ、楽しくなる事がある。

☆ ☆ ☆

今、愛らしく咲くその花々にふれ  
と、時として古人が名付けたその

鷺草は日当りの良い湧水性の湿原に自生する蘭科植物で、そそとした風情は優美で純潔な白鷺の羽ばたきに似ている。

と、時として古人が名付けたその

十数本の苗の中から、一輪か二輪早咲きの花が開く頃のおもむきは、

青田に舞い降りる白鷺が思いだされ

また、八分咲きともなると青田のあ

ちらこちらで小魚を漁っていた白鷺

が物音に驚き、一齋に舞い上がるさ

まが思いだされる。

☆ ☆ ☆

昭和の初め、東横線と田園都市線の開通により、荏原郡玉川村大字奥沢地区（現在の世田谷区九品仏）は

耕地整理のため、急激に都市化が進

み田畑は次々に埋められていった。

この奥沢はかつての奥沢城の跡で

南から北へ半島状の台地が早苗のな

びく青田へつき出していった。城址の

(ゆかしい姿の鷺草)



③



(ほととぎす)

まわりには泉が湧き出し、あたりの

青田には夏ともなると、真白な鷺草

が咲きほこっていたという。そして

ここには鷺草にまつわる伝説が年寄

から孫へと伝えられている。

☆ ☆ ☆

時は室町時代、世田谷城主・吉良

頼康は十二人の側室をもっていた。

ある日、家臣奥沢城主・大平出羽守

の娘、常盤は宮仕えの縁から頼康の

側室にむかえられた。才色兼備の常

盤は頼康の寵愛を一身に受け、なに

不自由ない幸せな日々を送っていた

が、それは長くは続かなかった。十

二人の側室は嫉妬し、頼康に仕えて

いた小姓と不義密通をはかったとき

ん訴され、遠ざけられた。常盤は悲

しみ、死を決意。幼い頃から愛育し

た白鷺の脚に遺書を結びつけ、両親の住む奥沢城へと放った。

帰城したが、時すでに遅く哀れ、常盤はこと切れていた。そして、不思議なことに白鷺の射落されたあたりからは一本の草が生え、白鷺に似た花を咲かせるようになったという。

悲しくも、せつないこの話は今や

自生する所すらなくなった、この花

にはふさわしく、心ひかれるものがある。

☆ ☆ ☆

あちこちに千社礼の貼られた禅寺

の山門をくぐり、杉の木立に囲まれ

た境内に入ると、あたりの静寂の中

で草むらの虫の声が寂しく響き、吹

く風に初秋の忍び寄りを感じる。

ひと雨来るのでは、と思っていた

曇り空が明るくなってきた武蔵野の

野火趾は時おり雲が切れ、初秋の柔

らかな空気が

は

は

は

は

は

は

(14頁下段へ)